

て、こうした再帰的な営みを、私たち一著者も、評者も、そして読者も一はずっと続けていくのだと思う。歴史を扱う意味について、著者は「望ましい未来についても構想する」(p. 22) ことだと述べ、そこにはある種の祈りのような感情が織り込まれている。昨今のルワンダにかかわる数多の研究者が補い合うなかで、あくまで「書く」という力に自覚的になることにおいて、すこしでも「望ましい未来」を創るためにこそ、私たちは書き続けることを諦めるわけにはいかないのだろう。

著者は幾度か自問する。「歴史に『もし』はないが」(p. 81) と。果たしてそうだろうか？ たしかに、起こってしまった出来事を変えることは難しい。ただし、過去は変えられぬ。それは、ルワンダの各政権がおこなってきたような、権力者による歴史認識の操作によってだけではない。それは、著者自身がルワンダの人びとに相対するなかで歴史の「上書き」(p. 82) の可能性に触れているように、個々人の認識の次元においても達成されうる。さらには、人びとの身体に積み重なってきた歴史は、突如として不用意に表出するものでもある。そうした個々の記憶のあり方は、著者がジョージ・オーウェルを引用して記すような、過去から未来に至る時間を「コントロールする」(p. 312) 力の間隙をすり抜けてゆく。実直な紙資料の解きほぐしの先に、「もし」を覆しうる状況的な真実との格闘へと開かれていくことを、評者は待望している。

歴史はいかに描けるだろうか。本書はこの困難な問いを、私たちに突きつけてくれる。

大石高典・近藤祉秋・池田光穂編。『犬からみた人類史』 勉誠出版、2019年、499 p.

榊澤麻美*

本書は、総勢 23 名の異なる分野一人類学、民俗学、動物行動学、生態学、遺伝学、動物考古学、動物心理学、科学史、環境学、狩猟、アトーの著者が、人類と犬とのかかわりの多様性とその変遷を、「犬の視点」からみた人類史として考察している。その時間的枠組みは一万年以上前から現代そして未来を眺望し、日本列島、東アジア、ヒマラヤ、アメリカ、オセアニア、アフリカ、西ヨーロッパと、人と犬が生活している世界中の地域を扱っている。本書の構成は、序章と 3 部 19 章と 5 つのコラムと 52 語のグロッサリーからなる。

序章で、まず、人類と犬の出会いを「二足歩行の開始、農牧革命、産業革命などとならぶ人類史を画するできごと」(p. 6) と位置づけ、これを「犬革命」としている。この革命は人類史のある時点の前後で劇的な変化を起こしたわけではなく、また人と犬は生物学的に依存した関係ではないが、その関係は一万年以上にわたって「強制的な手段に寄らない、社会的なコミュニケーションに基づいた異なる社会性動物どうしの共生状況」(p. 19) が、継続的に両者に影響を与えているとしている。また、本書のキーワードとして、「犬の学習とトレーニング」、「犬を飼う

* 京都大学アフリカ地域研究資料センター

ことの『コスト』, 「犬への愛着にまつわる『コスト』」を挙げている。

第1部では、オオカミと犬の共通祖先から、犬がわかれて、人と共生を始めるプロセスを考察している。そのプロセスにおいて、人が新石器革命を経て、狩猟採集生活から牧畜農耕生活を開始する流れのなかで、犬は「吠え」をコントロールするようになり(第1章)、また、オオカミよりも活動的で社会的で人の社会により受け入れられやすい性格をもつようになった(第4章)。また、オオカミとは異なる黒目強調型の眼に進化することで、人からかわいいと思われ、その犬と人が視線を交わすことでお互いにオキシトシンを発生させ、親子関係に似た愛着関係をもたせると考察している(第5章)。

第2部では、犬と人の関係が定着するなかで、その共生関係がどのように展開してきたかを描いている。アフリカ(第7章)と日本(第8章、第9章、第14章)の狩猟における犬の役割と猟師と犬の関係、アラスカ(第10章)とアイヌ(第11章)における犬ぞりの利用といった、異なる自然環境や条件における、人と犬の間のコミュニケーションと協働関係を描いている。そこでは、犬が単なる「道具」として維持管理される一面、パートナーとしてのある種の愛着あるいは敬意をもって接せられていることもうかがえる。第12章では、近代日本の国家主義・軍国主義の時代に、忠犬ハチ公の逸話から、日本における「日本犬」観がどのように「忠君愛国」のアイコンとして取り込まれていったかを紹介している。第13章では同じ時代

に、明治維新以降流入してきたさまざまな洋犬との雑種化を防ぐべく、日本犬保存会が発足し、犬の外見を基に「日本犬標準」が設定されるなか、犬種がいかに「合成」され、後に衰退していったかを紀州犬を例に記している。

第3部では、人と犬との関係を現代から未来について展望している。「人間化する犬」として、「犬の死」の扱われ方の変遷(第16章)、犬を「パートナー」として同居するドイツの動物性愛者の生活(第17章)、先進国での犬のアトピー性皮膚炎の要因と対処法が人のそれに類似していること(コラム4)、野生シカ肉の消費者としての犬(コラム5)が挙げられている。また、人と犬の共存と境界線という点から、人間社会と併存するブータンの街の犬社会(第18章)やダナ・ハラウェイによる「コンパニオン・スピーシーズ」の概念を紹介している(第19章)。

本書で最も評者の印象に残った章は、第15章「境界で吠える犬たち—人類学と小説の間で」であった。筆者の菅原和孝は幼少期の体験から犬を怖いと思いながらも、犬が登場する小説を読みふけり、犬を飼うことを夢見た思春期を経て、フィールドワーカーとして、カラハリでグイという狩猟採集民と彼らのやせこけた猟犬たちと過ごすのである。グイの人と犬との間で太古の昔に交わされたであろう社会的契約—人の猟を手伝う代償として、犬はシェルターと餌を得る—において、筆者は「ろくすっぽ餌ももらえず、あばらを浮きださせ、人糞を食って命をつないでいるカラハリの犬たちを見るたびに、私は、契約

を裏切っているのは人間の方ではないか、と疑わざるえない。」(p. 361)と語っている。また、筆者は犬の純真さこそが「犬」という実存の可能性の中心にあり、「《犬とは最愛の人よりも先に死ぬ実存である。》」と定義している。この純真さを都合よく利用し、その理由を正当化してきた人と犬との一万年以上もの関係は、人と自然資源や環境、人間社会における搾取する者とされる者との関係を思い起こさせる。

本書を読むにあたって、まずはグロッサリーを一読されることをお勧めする。意味を覚える必要は無いが、これらの用語は本書を理解するうえで、サブキーワードともいえる。また、本書の随所で引用されている、ダナ・ハラウェイの著書「伴侶種宣言—人と犬の『重要な他者性』」[2013]と「犬と人が出会うとき—異種協働のポリティクス」[2013]を参考図書として併読することを勧める。

本書では猟犬や犬を使った猟法やそれを行なう人びとに関連した話が頻繁に出てくる(第2章、第7章、第8章、第9章、第14章、第15章)。人類史において、狩猟の分野での犬の役割や人との関係がそれだけ重要であったということの表れであろうが、「犬の視点から人類史を考察する」といった興味深く、そして多くの想像力を駆り立てる目標を掲げていればこそ、もう少し他の視点に関しても紙面を割いて、議論を展開してほしい。たとえば、現代の犬肉食文化についての論説が少ないのが残念である。犬肉食文化は西洋化する社会のなかでタブー視され

ているが、評者が知る限りでは、東アジアや東南アジアの国ではまだまだ広く食されており、その一方でペットとして服を着させられた犬を同じ街角で見かける。あとのなかで、本書の企画の発端となった「狗類学」のチームで大阪市内の犬が食べられるレストランに行った、海外で肉食用に育てられた犬の肉を美味に感じた、といった記載があるが、日本での犬肉食文化についても言及してほしい。同様に、犬に関する法規、ペット市場の殺処分、保護犬、介助犬、麻薬・爆発物探知犬、犬型ロボットについても、本書のなかで扱ってほしい事項であった。また、序章では、第3部において、「現代社会の『人間化する犬』と『犬化する人間』の混交状況が語られる。」とあるが、「人間化する犬」は明確であったが、「犬化する人間」に関しては評者には読み取れなかったため、片側だけの理解で終わってしまった。

人と犬の共生において、これまでは、犬側が人の社会に受け入れられるために進化してきたという印象を受けた。一方で、人はどうか？世界の一部とはいえ、グローバル化が進んだ社会での犬肉食や殺処分に対する批判が高まってきており、それに伴い関連する法規改正も行なわれてきている。飼い主の多くは犬を家族の一員として扱い、ペットフードの多様化や高級化だけでなく、ペットのための服、トリミング、マッサージ、保険、医療、介護、義肢、ホテル、ペットと住める住宅といったあらゆる「サービス」が彼らのために用意されており、経済や産業の一部となっているといっても過言ではないだろ

う。ちょうど本書を読んでいる時、世界各地ではコロナ感染防止のため外出禁止令が出されていた。感染被害が深刻な欧米の一部の国々でも、犬の散歩は食料・日用品・医薬品の確保といった生活に必要な活動と同様に、一定の条件は伴うものの許可されていた。長い共生関係のなかで、これまでは、どちらかという人は自分たちの目的や状況に応じて、犬を時には「道具」「食糧」、時には「友」「パートナー」として都合よく扱ってきたが、犬が人間の愛着を勝ち取り、人間をその愛着に依存させることで、「人間こそが犬にとっての〈愛情の寄生虫〉」(p. 450)となり、徐々にこの関係性が変化してきているのではなからうかとも思う。

本書により、人間の文化・社会・生活様式の多様性と複雑さが、そのまま人と犬の関係の多様性と複雑さを照射していることが理解できた。また、身近な存在である犬と人の関係と共生について考察するとともに、「『人はいかに他者と共存できるか』を考えること」(p. 20)の機会を与えてくれた。

引用文献

- ハラウェイ, ダナ. 2013. 「伴侶種宣言—人と犬の『重要な他者性』」永野文香訳, 以文社.
_____. 2013. 「犬と人が出会うとき—異種協働のポリティクス」高橋さきの訳, 青土社.

瀬戸裕之・河野泰之編. 『東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略—避難民・女性・少数民族・投降者からの視点』明石書店, 2020年, 328p.

渡辺彩加*

本書は、長期にわたり種々の戦争が継続した東南アジア大陸部において、犠牲者としてみられがちな地域住民を避難民、女性、少数民族、投降者に分け、戦中・戦後の社会変化に彼ら彼女らがどのような主体的な対応、すなわち、生存戦略をとってきたのかについて、公的な文書に記録されない人びとの語りを書き起こすオーラル・ヒストリーの手法をもとに考察し、戦争の勝利者からみた戦後史とは異なる被戦争社会の実相を描いた本である。ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマーの5つの国と地域を、国や地域別の編成をとらず、また、歴史学、政治学、経済学、社会学、文化人類学など多様な分野の専門家が、幅広い調査対象者にアプローチをかけた意欲的な本である。

本書は序論とおわりにを除く3部7章から構成されている。以下、本書の内容を概観する。

まず序論では、本書の本題意識を明らかにしながら、前述した東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略といった2つのキーワードに着目すべき意義を述べている。著者らは、先行研究の課題として、本書の主題である「東南アジア大陸部の戦争」と「地域

* 京都大学大学院総合生存学館